

【高等学校の部】 優秀賞

一投に思いを込めて

学校法人溝部学園別府溝部学園高等学校 3年

川野 渚



「ふっ」と息を吐いてサークルに入り、「いきまーす。」「はーい。」で始まる私の時間。たった60秒の私の時間。60秒という短い時間の中で、最高のパフォーマンスをするために私は毎日努力をしてきた。

私が陸上競技の砲丸投げと出会ったのは、今から6年前の中学1年生の10月。当時の陸上競技部の顧問の先生に声をかけてもらったのが始まりだった。私はすぐに入部することを決めることができなかったが、顧問の先生对我的期待に応えるために私は入部を決めた。それから始まった私の競技人生。砲丸を手にとって感じた2.721キログラムの重さ。私と先生の一对一の練習。しっかり指導してもらえただけ焦りと不安が募る。1人で抱え込みながら続いた毎日の練習が続き、中学2年生の2月、私は先生と対立をした。「練習に来なくていい。」と言われ、私は行き場を失った。ある日の昼休み私は先生に呼ばれグラウンドへ行った。そこにいた先生はスコップを持って立っていた。「投てき場を作るぞ。」「もう一度頑張ろう。」と言われ、私は感謝の気持ちでいっぱいになった。手作りの投てき場で力を付けた私は、中学3年生最後の県中学総体で自己ベストを大幅に更新し3位入賞を成し遂げた。その結果を受け私は高校生になっても砲丸投げを続けることを決意した。

高校生になり先輩と同級生と出会うことができた。経験者という立場でいた私は少し油断をしていた。そしてすぐに力の差を味わうことになった。つきつけられた現実。甘くなかった砲丸投げの世界。私はそこから長くて深いスランプにはまってしまった。投げても投げても伸びない記録。同級生がどんどん記録を出していく中、私は一人とり残されていった。大会に出場しても笑顔で終わることができず涙で終わることが増えた。やめたい。投げたくない。そんな気持ちが日に日に増していった。どうにかしてスランプを抜け出そうと考えた私は初心に返ってみることにした。手の平のどこに砲丸を置くか、グライドをする時の腰の高さ、パワーポジションのとり方。砲丸投げの基本を改めて学び、実践してみることにより、私の欠けている部分をたくさん発見することができた。何度も分かるまで、できるようになるまで先生は指導してくれた。携帯電話で私の動きを録画して自分の目で分かるようにしてくれた。ここまで熱心に指導してくれる先生を私はもう一度、九州大会に連れていきたいと心から思った。3年間の感謝の気持ちを込めて。

ついに始まった県高校総体。この大会が上級大会につながる最後の大会。私の気持ちはとても高ぶっていた。最終日が試合ということもあって、少しは心に余裕を持つことができた。試合当日。今まで緊張したことがなかった私だったが、この日だけは違っていた。胸に触れなくてもわかる心臓の音。手の震え。「ああ、私とても緊張しているんだ」と実感した。サークルに入っても気持ちを落ち着かせることができない。砲丸を押し出すことができなかった。なんとかベスト8に残ることができた。6投目。「足が出てもいい、思い切り投げよう」、そうつぶやいた。9メートルのラインを少し超えたところで落ちた。その瞬間全てが終わった。涙があふれた。悔しいより情けない思いだった。

8月、私学体育大会も終わり、引退の日を迎えた。3回も九州大会に出場することができた。最後は3年生4人が笑顔だったことがよかった。5年間の砲丸投げ生活。楽しかったとは言えないが、大きく成長することはできたと思う。またいつか砲丸を投げたい。5年間のありがとう。砲丸投げ、これが私の努力してきたこと。